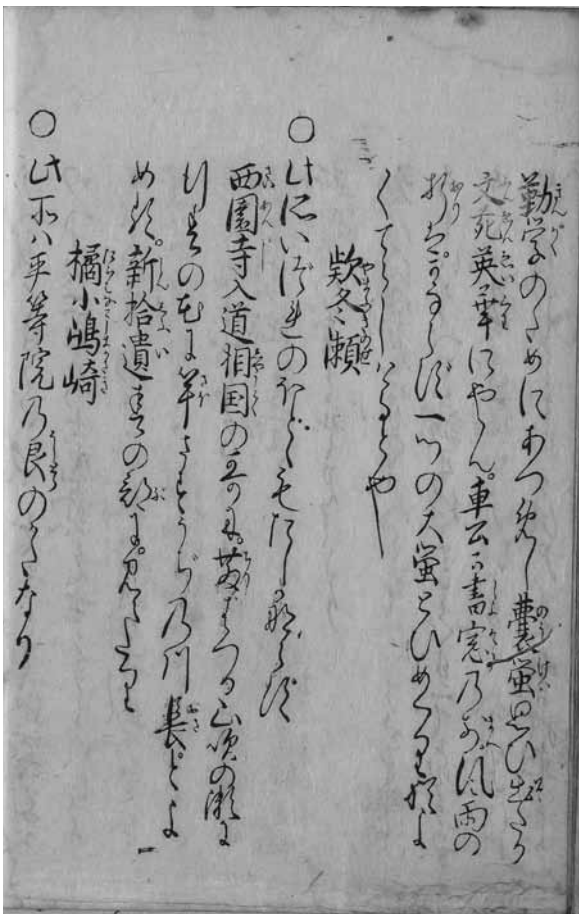
巻六「欵冬瀬」



京都府立総合資料館蔵

【原文】

欵冬瀬

○此所いづれのほどゝもたしかならず

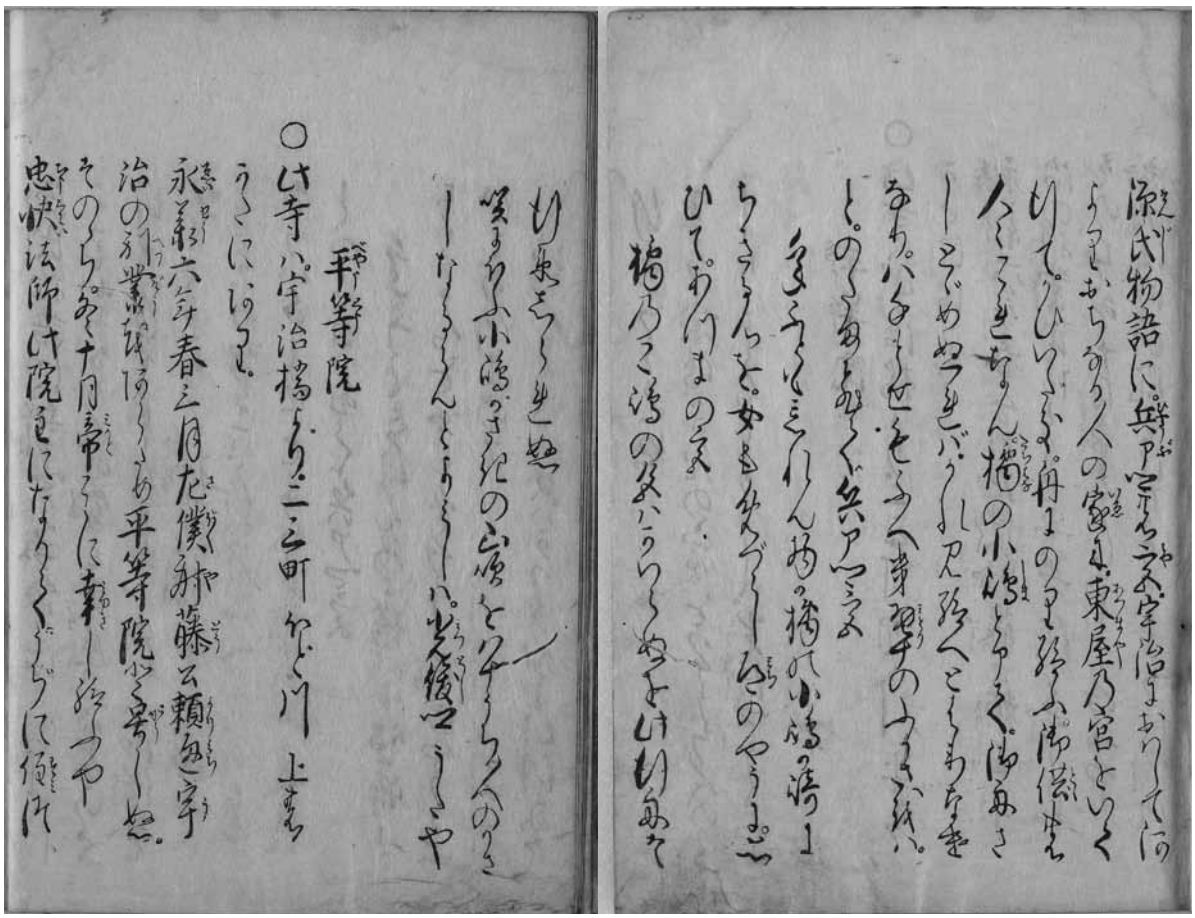
西園寺入道相国の哥に。散はつる山吹の瀬に

行春の花に竿さすうぢの川長。とよ

める。新拾遺春の部に。見えたり

橘小嶋崎

○此所は平等院の艮のかたなり（七ウ）



京都府立総合資料館蔵

源氏物語に。兵部卿の宮、宇治におはして河よりおちなる人の家に。東屋の宮をいて行て。かひいだき。舟にのり給ふ。御供の人々これなん。橘の小嶋と申て。御舟さしとゞめぬれば。かれ見給へとはりなけなり。八千とせもふへき翠のふかさをは。と。のたまひて。兵部卿宮

年ふとも忘れん物か橘の小嶋か崎にちきる心を。女もめづらし道のやうに。思ひて。あつまの宮

橘のこ嶋の色はかはらぬを此行舟そ（八オ）

行衛しられぬ

咲にほふ小嶋がさきの山吹を八十うち人のかさしなるらんとよみしは。光俊卿うた也

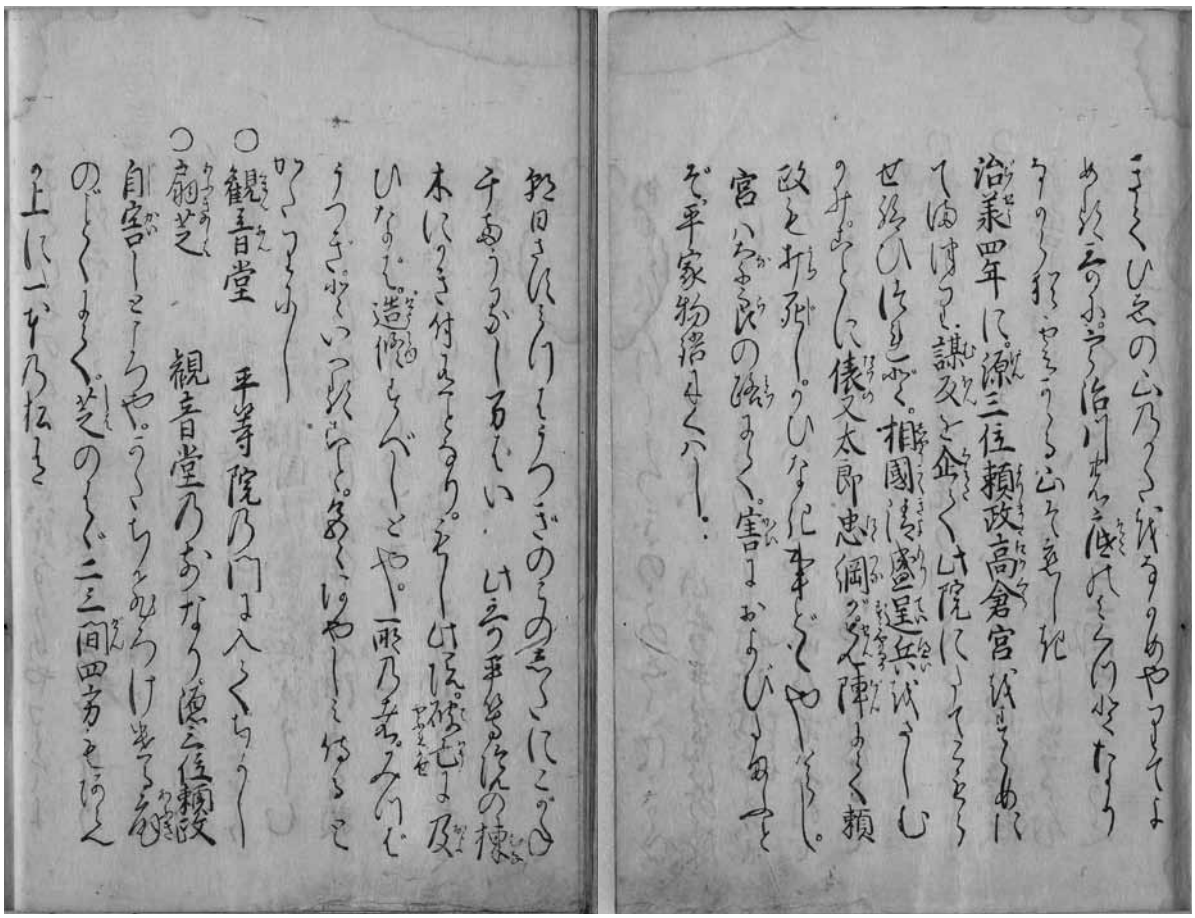
平等院

○此寺は。宇治橋より、二三町ほど川上のかたにあり。

永承六年春三月左僕射藤公頼通宇治の別業をあらため平等院と号しぬ。

そのゝち。冬十月帝こゝに幸し給ふ也

忠快法師此院主になりて。うぢに住つ（八ウ）



京都府立総合資料館蔵

きてひゐの山のかたをなかめやりてよ
める哥に。宇治川の底のみくつとなり
なから猶雲かかる山そ恋しき
治承四年に。源三位頼政高倉宮をすゝめた
てまつり、謀反を企て此院にたてこもら
せ給ひつれど。相国清盛逞兵をさしむ
かゐ。ことに俵又太郎忠綱が先陣にて頼
政も打死し。かひなき事ども也けらし。
宮は奈良の路にて。害におよびたまふと
ぞ。平家物語にくはし。（九オ）
朝日さすみつはうつぎのこのしたにこがね
千両うるし万ばい　此哥平等院の棟
木にかき付有となり。もし此院破亡に及
ひなば、造修すべしと也。所の者。みつば
うつぎ。といへること。色々あやしみ侍ると
かたりにし

○扇芝　観音堂の前なり。源三位頼政
自害しところ也。かたちひろけける扇
のごとくにて。芝のはゞ二三間四方もあらん
か上に一本の松有（九ウ）

【校訂本文】

欸冬瀬

○此所いづれのほどともたしかならず。

西園寺入道相国（注1）の哥に、散はつる山吹の瀬に

行く春の花に竿さす宇治の川長（注2）、とよめる。新拾遺春の部に、見えたり。

橘小嶋崎

○此所は平等院の艮（注3）のかたなり。

源氏物語に兵部卿の宮、宇治におはして河より遠方なる人の家に、東屋の宮を率て行て、かひいだき、舟にのり給ふ。御供の人々「これなん、橘の小嶋（注4）」と申て、御舟さしとどめぬれば、「かれ見給へ」とわりなげなり。「八千歳もふべき翠のふかさをば。」と、のたまひて、兵部卿宮（注5）

年ふとも忘れん物か橘の小嶋か崎にちぎる心を。

女もめづらし道のやうに、思ひて、あづまの宮

橘のこ嶋の色はかはらぬを此の行く舟ぞ行衛しられぬ

咲にほふ（注6）小嶋がさきの山吹を八十うぢ人のかざし（注7）なるらんとよみしは、光俊卿（注8）うた也。

平等院

○此寺は、宇治橋より、二三町（注9）ほど川上のかたにあり。

永承六年（注10）春三月左僕射（注11）藤公頼通（注12）宇治の別業をあらため平等院と号しぬ。そののち、冬十月帝（注13）ここに幸し給ふ也。

忠快法師（注14）此院主になりて、宇治に住つきて比叡の山のかたをながめやりてよめる哥に、宇治川の底のみくづとなりながら猶雲かかる山ぞ恋しき（注15）

治承四年（注16）に、源三位頼政（注17）高倉宮（注18）をすすめたてまつり、謀反を企て此院にたてこもらせ給ひつれど、相国清盛逞兵（注19）をさしむかゐ、ことに俵又太郎忠綱（注20）が先陣にて頼政も打死し、かひなき事ども也けらし。宮は奈良の路にて害におよび給ふとぞ。平家物語にくはし（注21）。

朝日さすみつばうつぎのこのしたにこがね千両うるし万ばい（注22）

此哥平等院の棟木にかき付有となり。もし此院破亡に及びなば、造修すべしと也。所の者、みつばうつぎ（注23）、といへること、色々あやしみ侍るとかたりにし。

○扇芝（注24）　観音堂の前なり。源三位頼政自害しところ也。かたちひろげける扇のごとくにて、芝のはば二三間（注25）四方もあらんが上に一本の松有り。

【注】

（1）西園寺入道相国…西園寺実兼（一〇五三～一一〇七）。相国は太政大臣の中国風の呼名。

（2）散りはつる…『新拾遺和歌集』巻三、夏、一八二番歌。「二品法親王道助家五十首歌に　河山吹」

（3）東北の方角。

（4）『源氏物語』に由来する中世の歌枕。宇治橋下流にあった河州の一つ。

（5）『源氏物語』の匂の宮のこと。宇治十帖の主要人物で、彼が薫の愛人である浮舟と宇治で密会する箇所に橘小嶋が出てくる。東屋の宮は、東屋巻から登場する浮舟をさす。宇治八の宮の三女なのでこのように呼ぶか。

『源氏物語』浮舟巻の当該場面

「川よりをちなる人の家に率ておはせむ、と構えたりければ、さきだちてつかはしたりける。…有明の月澄みのぼりて、水の面も曇りなきに、「これなむ橘の小島」と申して御舟をしばしさしとどめたるを見たまへば、…「かれ見たまへ。いとはかなけれど、千年も経べき緑の深さを」とのたまひて

（匂の宮）年経ともかはらぬものか橘の小島の崎に契る心は

女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、

（浮舟）橘の小島の色はかはらじをこの浮舟ぞゆくへしられぬ」

（6）『続古今和歌集』巻二、春下、一六三番歌。「文永二年七月七日題を探りて七百首の歌人々によませ侍りしに島山吹を」。

（7）冠や頭髪につける飾り。

（8）藤原光俊（一二〇三～一二七六）。

（9）一町は約一一〇メートル。

（10）一〇五一年。

（11）左大臣の中国風の呼名。

（12）藤原道長の嫡男。九九二～一〇七四。

（13）後冷泉天皇（一〇二五～一〇六八）、頼通の甥にあたる。

（14）比叡山の法師、生没年未詳。院主は住職をさすが、忠快は寺主(堂塔の管理を司る役職)とされる。

（15）『金葉和歌集』巻九雑上五九〇番歌、「宇治平等院の寺主になりて、宇治に住みつきて、比叡の山のかたをながめやりてよめる」。

（16）一一八〇年。

（17）一一〇四～一一八〇、平安末期の武将歌人。治承四年に後白河院皇子以仁王（もちひとおう、高倉宮)を奉じて反平家の兵を挙げたが、敗れて三井寺から奈良に落ちる途中、平等院で自害した。

（18）後白河院第二皇子以仁王（一一五一～一一八〇）。本文にある通り、南都を頼って逃げる途中、山城国相楽郡光明山寺の前で追手の矢を受け、落馬したところを首を取られた。

（19）強く勇猛な兵。

（20）下野国の人、足利又太郎忠綱。藤原秀郷（俵藤太)の子孫。この合戦については『平家物語』の「橋合戦」・「宮御最期」に詳しい。

（21）他本（万治元年版)では「代々人々の奔渡にいひ出せることおほし。陸行にも不可忘」という異文が「平家物語にくはし」と「朝日さす」の間にある。

（22）埋蔵金伝説において宝物の隠し場所を指示する歌の典型。全国の埋蔵金伝説に「朝日さし夕陽かがやく木の下で黄金千両漆万杯」等類歌が多数見られる。

（23）三ツ葉空木科の落葉低木。

（24）『平家物語』・『源平盛衰記』には、頼政の自害の場所と

して「扇の芝」に関わる記述はない。謡曲「頼政」から、扇を敷いて自害したという由来伝説が文献に登場する。

（25）一間は約一、八メートル。

【現代語訳】

山吹の瀬

○この場所はどの辺りかはっきりしません。西園寺入道太政大臣の和歌に

山吹の瀬に晩春の散り果てた山吹の花びらが浮かぶ、その川面に棹をさす宇治川の渡し守よ

橘の小嶋が崎

○この場所は平等院の東北の方角です。『源氏物語』に、兵部卿の宮が宇治にお出でになって川の対岸にある人の家へと、東屋の宮を連れ出して抱き上げ船にお乗りになる。お供の人々が「これが橘の小嶋です」と申し上げて御船を途中で停めたので、宮は「あれを御覧なさい。とてもちっぽけな島だけれども、八千年も経たような橘の濃い緑の葉を」と仰って、兵部卿の宮

年月が経っても忘れたりするものか。橘の小嶋の常緑の色のように、変わらないと約束したあなたへの愛情は

女も珍しい道行のように思って、東屋の宮

橘の小嶋の木の常緑は変わらなくとも、この漂う船のようにはかない我が身はこれからどうなってしまうかわからないことです

美しく咲き匂う小嶋が崎の山吹の花、これは多くの宇治の里人が冠にさす花飾りなのだろうと、詠んだのは藤原光俊卿の和歌です。

平等院

○この寺は、宇治橋より二・三町ほど川上の方角にあります。

永承七年の春、三月に左大臣藤原頼通公が宇治の別荘を改めて寺院とし、平等院と名付けたのです。その後、冬十月に、天皇が行幸なさったのです。

忠快法師がこの寺の院主になって宇治に定住して、かつて住んでいた比叡山の方角を眺めて詠んだ和歌

宇治川の川底に沈む塵芥のように身はここに留まる私だけれど、やはりあの雲のかかっている比叡山が恋しいことだ

治承四年に源三位頼政が高倉宮にお勧め申し上げ謀反を企てて、この平等院に立て籠もりなさったけれど、太政大臣平清盛はすぐに追討の軍勢を差し向け、特に俵又太郎忠綱が先陣で攻撃したので頼政も戦死し、挙兵も無駄になったようです。高倉宮は奈良へ逃げて行く途中で殺されなさったそうです。平家物語に詳しく記されています。

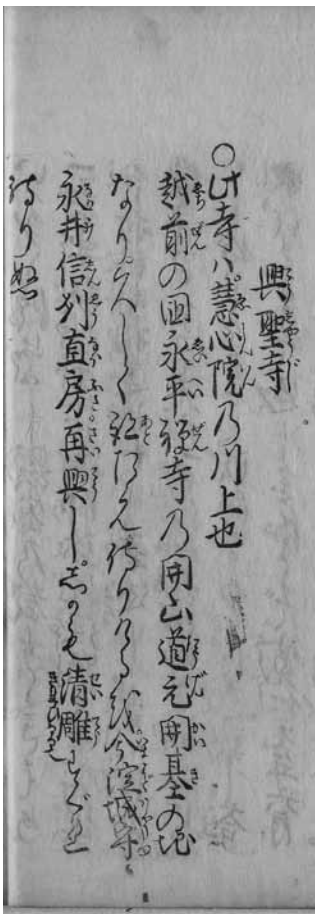
朝日のさす三つ葉空木の木の下には黄金千両、漆万杯

この歌は、平等院の棟木に書き付けてあったといいます。もし、この院が破壊されるようになればこの財宝で再建するようにとのことです。土地の者は「三つ葉空木とは何だろうと様々に不思議がっております」と語っていました。

○扇の芝　観音堂の前にあります。源三位頼政が自害した場所です。土地の形は広げた扇のようで、幅二・三間四方もありそうなほど芝を張っている上に、一本の松の木が生えています。

（安達敬子）

巻六「興聖寺」



京都府立総合資料館蔵

【原文】

興聖寺

○此寺は。慧心院の川上也

越前の國永平禅寺の開山道元開基の地

なり。久しく跡たえ侍りけるを。今淀城守

永井信州直房。再興し。しかも清（きれひなる也）彫すぐれ

侍りぬ（十一ウ）

【校訂本文】

興聖寺

○此寺は、慧心院（注1）の川上也。

越前の國永平禅寺の開山道元（注2）開基の地なり。

久しく跡たえ侍りけるを、今淀城守永井信州直房、再興し、

しかも清（きれいなる也）彫（注3）すぐれ侍りぬ。

【注】

（1）恵心僧都源信によって寛弘二年（一〇〇五）に再興された寺。

（2）曹洞宗の開祖（一二〇〇～一二五三）。彼が嘉禎二年（一二三六）、京都深草に建立した興聖宝林寺が起こりで日本の曹洞宗寺院の最初。道元が後に福井の永平寺に移住したため、廃絶したが慶安元年（一六四八）、淀城主永井尚政が現在地に再興した。

（3）慶安二年に建築された本堂は伏見城の遺構を移した物と言われる。

【現代語訳】

興聖寺

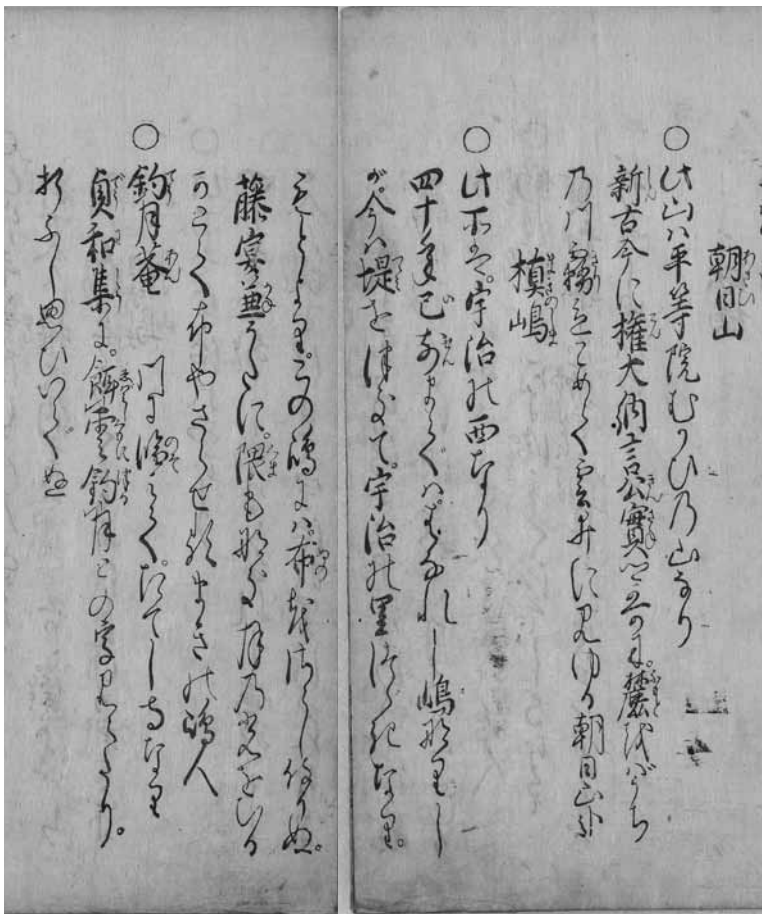
○この寺は慧心院の上流にあります。

越前の国で永平禅寺を開いた道元が寺を創設した場所です。

長い間廃絶していましたが、現在の淀城主永井信濃守直房が再興したうえに美しい造作も優れています

（安達敬子）

巻六「朝日山」



京都府立総合資料館蔵

【原文】

朝日山

○此山は平等院むかひの山なり

新古今に権大納言公實卿哥に。麓をばうち

の川霧立こめて雲井に見ゆる朝日山哉

槇島

○此所は。宇治の西なり

四十年已前までは。はなれし嶋なりし

が。今は堤をつきて。宇治の里つゞきなり。（十三オ）

もとより。この嶋には。布をさらし侍りぬ。

藤宴兼うたに。隈もなき月の光をひる

かとて布やさらせるまきの嶋人

○釣月庵　川に臨みて。たてし寺なり

貞和集に。餌レ雲　釣レ月との字見えたり。

折ふし思ひいてぬ（十三ウ）

【校訂本文】

朝日山

○此山は平等院むかひの山なり。

新古今に権大納言公實卿（注1）哥に、麓をば宇治の川霧立こめて雲井に見ゆる朝日山哉（注2）

槇島

○此所は、宇治の西なり。四十年以前までは、はなれし嶋なりしが、今は堤（注3）をつきて、宇治の里つづきなり。もとより、この嶋には、布をさらし侍りぬ。藤宴兼うた（注4）に、

隈もなき月の光をひるかとて布やさらせるまきの嶋人

○釣月庵（注5）　川に臨みて、たてし寺なり。貞和集（注6）に、「餌レ雲　釣レ月」との字見えたり。折ふし思ひいでぬ。

【注】

（1）藤原公実（一〇五三～一一〇七）。

（2）『新古今和歌集』巻五秋下、四九四番歌。「堀河院御時、百首歌奉りけるに、霧をよめる」。

（3）文禄年間（一五九二～一五九六）、豊臣秀吉の伏見城築城に際し堤が作られた。

（4）「隈もなき」の和歌は『夫木和歌抄』巻二十三、島の部に藤原宣兼の歌として所収されており、「宴」は「宣」の誤写であろう。

（5）南北朝期、祐乗道人なる人物の草庵という。釣月山誓澄寺の一角にあったか。伏見の指月庵・宇治の蔵勝庵と並んで洛南三勝として観月の名所とされた。禅僧義堂周信の日記『日用工夫集』には永徳元年（一三八一）、彼が釣月庵を訪れ祐乗道人と歓談した記事が見える。

（6）『貞和類従祖苑聯芳集』の略称。全一〇巻。義堂周信が宋・元の禅僧の作った偈頌を集め分類編纂したもの。

【現代語訳】

朝日山

○この山は平等院の川向かいの山です。新古今和歌集の権大納言公実卿の和歌に

山の麓には宇治川の川霧が立ちこめているけれど、峰は雲の上にそびえて見える朝日山だなあ

槇島

○この場所は宇治の西にあります。四十年前までは陸から離れた島でしたが、今は堤を作って宇治の里と地続きになっています。もとからこの島では川の水で麻布を晒していました。藤原宣兼の歌に

曇りない満月の光を昼間だと思って布を晒しているのだろうか、槇島の人々は

○釣月庵　宇治川に面して建てた寺です。貞和集に「雲の上で餌をまき月を釣る」との文句があったと折にふれて思い出すことです。

（安達敬子）